

第160回くらしの植物苑観察会 2012年7月28日(土)

-縄文時代の栽培植物と農耕-

山田 康弘(国立歴史民俗博物館 准教授)

— 縄文人は花を愛でたのか? —

縄文時代になると、当時の人々は身の回りにある自然の植物に対して、様々な形で積極的に関わっていくようになりました。人にとって有用な特定の植物に対して、これをたくさん育てるように、できるだけ多く採れるようにいろいろと手をかけることを、大きな意味で「管理」と呼びます。縄文時代の人々は、実に様々な植物を「管理」していたことが、近年の研究からわかってきました。

そのような多くの植物は、縄文時代の人々にとって食料となるものでした。例えば、クリやドングリ、トチノミなどといった堅果類やエゴマなどは、縄文時代の人々が積極的に「管理」をしていたと古くから考えられています。また、ダイズ、アズキなどのマメ類も栽培されていたようですし、縄文時代の終わり頃の西日本ではイネなどの穀類の栽培が行われていた可能性も高くなっています。このような状況を踏まえて、考古学研究者の中には縄文時代にも「農耕」が存在したと考える方もおり、その存否については現在でも議論が行われている所です。

しかしながら、縄文時代の人々は植物を食料として利用しただけではありませんでした。これには、例えば、漆の利用や植物繊維による編み物、カゴの製作など様々なものがあげられます。縄文時代の人々は数多くの植物を、それらを食料や身の回りの生活用具の材料として上手に利用していたのです。

ところで、このように高度な植物利用をしていた縄文時代の人々にも、花を愛でるといえるようなことはあったのでしょうか。これまでの考古学の概説書は、この問題に対してあまり触れることはありませんでした。実はこの問題についても最近の考古学的研究成果は一定の見通しを持ちつつあります。かつてイラクのシャニダール洞穴から発見されたネアンデルタール人の遺体には、ヤグルマキクの花束が供えられていたと考えられています。それから、数万年へたった縄文時



トチの花

代のお墓からも、様々な植物が供えられていた可能性が出てきています。ひょつとすると、私たちと同じホモ・サピエンスである縄文時代の人々も、花を愛で、死者を悼んで花束を供えたのかもしれませんが。

今回は、縄文時代のいわば実用的な植物利用についてお話しをする一方で、縄文時代の人々が植物に対してどのような「想い」を持っていたのか、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。

.....

次回予告 第161回暮らしの植物苑観察会 2012年8月25日(土)
「朝顔の仲間たち」 仁田坂 英二(九州大学大学院)
10:00~12:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要